

## 新刊紹介

稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編  
『日本の家族1999-2009——全国家族調査〔NFRJ〕による計量社会学』  
(東京大学出版会, 2016年)

藤間 公太\*

本書は、日本家族社会学会によって継続して行われている「全国家族調査 (NFRJ)」のデータを用い、日本における家族をめぐるさまざまな事象を計量社会的に分析したものである。NFRJは1999年、2004年、2009年の3回実施されており、当初から定期的に反復横断調査を行うことを念頭にデザインされた。NFRJ以前には家族研究者が利用できる信頼性の高い大規模データは存在せず、非常に画期的な調査である。

本書は5部構成をとっている。第I部は家族の基本構造についてのものである。「2000年前後の家族動態 (第1章)」、「夫婦の情緒関係 (第2章)」、「家族についての意識の変遷 (第3章)」、「ネットワークの構造とその変化 (第4章)」という4章を通じ、夫婦の結婚満足度や家族意識を規定する要因、定位家族への依存性の高まりなどが分析される。

第II部は家族構成と家族行動にかかわるものであり、「教育達成に対する家族構造の効果 (第5章)」、「現代日本における子どもの性別選考 (第6章)」、「離婚と子ども (第7章)」といったテーマが論じられる。総じて子どもの性別に対する選好は弱まっていることや、家族を媒介とした格差の拡大・再生産が起きていることが明らかにされる。

第III部では育児期の家族に焦点化し、「父親の育児参加の変容 (第8章)」、「育児期の女性の就業とサポート関係 (第9章)」、「育児期のワーク・ライフ・バランス (第10章)」、「子どもへの母親のかわり (第11章)」について議論される。各章とも

従来指摘されてきた傾向をおおむね追認する一方で、女性が自身のライフスタイル選好にもとづき資源を活用することなども明らかにされる。

第IV部では成人期の家族関係がテーマであり、「中期親子関係の良好度 (第12章)」、「親への援助パターンとその変化 (第13章)」、「成人期のきょうだい関係 (第14章)」、「公的介護保険導入にともなう介護期待の変化 (第15章)」が論じられる。世代間、世代内ともに家族関係は女性によって維持されており、男性同士の関係、あるいは男性との関係は低調になることが示される。

第V部では性別役割分業に関するものであり、「有配偶女性からみた夫婦の家事分担 (第16章)」、「ワーク・ファミリー・コンフリクト (第17章)」、「有配偶女性の就労と性別役割分業意識 (第18章)」という3つの章を通して、総じて伝統的な性別役割分業とそれをめぐる意識が維持されているものの、わずかながら平等化の傾向もみられることが示される。また、「マルチレベル分析による家族研究 (補章)」では、本書の多くの章で用いられたマルチレベル分析についての解説がなされる。

本書全体を通じて、1999年から2009年の間、日本の家族には変化した部分と変化していない部分とがあることがわかる。変化が見られた部分は、第1に、雇用の不安定化に伴い、定位家族による生活保障の役割が強まっていることである。第2に、高齢の親が相対的に自立してきていることである。これは公的年金制度の影響と推察される。第

\* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部研究員

3に、むしろ子世代の未婚化・晩婚化や就労の不安定化を背景に、中高年の子どもが親と同居するケースが増えている。

逆に変化が乏しかった部分としては、結婚満足度や夫婦の情緒的サポート、夫婦の家事分担・育児分担、関係性のあり方における性差が挙げられる。換言すれば、ごくわずかな平等化はみられるものの、性別役割分業やジェンダー偏在性は変化しておらず、また女性によって家族関係が活発化することも安定してみられる、ということである。

以上の本書の知見は、社会保障制度を考えるうえでもきわめて重要である。家族を資源として利用できるか否かによって生活のありようが変わるということからは、今後未婚化が進んだとき、シングル生活保障に大きな格差が生ずることを予想させる。女性によって家族関係が活発化するという知見も踏まえれば、未婚、無配偶男性が直面する問題はとくに深刻なものになるだろう。さらに、親の離婚を経験するか否かによって子どもに格差がもたらされることも予想できる。結婚して

子どもを持つことが当たり前ではなくなった今日、家族を媒介せずとも生活が保障される社会を作る必要性が高まっていることが示される。

このように、本書は今日の家族や社会保障を考えるうえで数多くの示唆に富んでいる。各章とも問いから結論に至るまでの流れが非常にクリアであり、計量研究を専門としない者が読んでも非常に知的好奇心を刺激される。家族研究者のみならず、多くの社会学者にとって必読の書に違いない。

#### 付記

本稿は、第26回日本家族社会学会大会でのラウンドテーブル「NFRJ98-08は何を明らかにしてきたか」における、稲葉昭英氏（慶應義塾大学教授）の議論に多くを依っている。執筆にあたり議論を参照、引用することをご快諾いただいた稲葉氏に、記して御礼申し上げます。

（とうま・こうた）